ποιμήν
ポイメーン

知っておきたいキリスト教のことば （173）

羊飼い ひつじかい

クリスマス劇を、学校や幼稚園で上演することがあります。その登場人物にはマリアさん、ヨセフさん、天使ガブリエル、宿屋さんなどと一緒に、羊飼いや羊も出てきます。

イスラエルの王であったダビデはもともと羊飼いでした。しかしこの仕事は想像以上に過酷だったようです。

羊はとても弱い動物で、草原やオアシスに行くのにも羊飼いに連れていってもらわないといけません。また外敵も多く、羊飼いたちは夜通し羊の群れの番をしていました。さらに羊と共に過ごしていると、「安息日」を守ることができません。週に一日労働から離れることなどできず、またケガをした羊の血に触れることで「汚れた」と見なされることもありました。そのため共同体からは排除されていたようです。その社会から疎外されていた人たちに、イエス様の誕生の知らせが真っ先に届けられたということが、わたしたちにとって大きな恵みなのです。

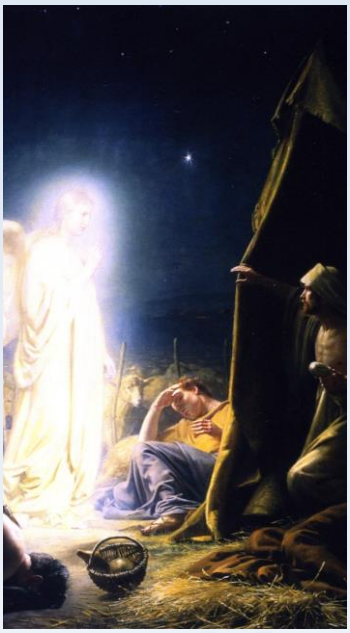
そしてイエス様は、わたしたちの「良い羊飼い」として来られました。イエス様は羊が襲われても見捨てて逃げてしまうことなく、自分の命を差し出してくださいます。わたしたちに命を与えるために寝ずの番をし、敵からわたしたちを守って下さるのです。

聖書には他にも、羊飼いが出てくる箇所があります。有名なのは、詩編 23 編でしょう。

主は羊飼い、わたしには何も欠けることがない。主はわたしを青草の原に休ませ　憩いの水のほとりに伴い　魂を生き返らせてくださる。（詩 23:1～3）

羊飼いであるイエス様が共にいてくださる。その喜びを感じていきましょう。

次回は「人の子」です。お楽しみに。



「羊飼いと天使」
カール・ブロッフォ
（1834～1890 年）

わたしは良い羊飼いである。良い羊飼いは羊のために命を捨てる。

（ヨハネによる福音書 10 章 11 節）